黒タイの蚊帳

蚊帳（標本番号H179219、高さ／162cm　幅／204cm　奥行／160cm）

樫永 真佐夫（かしながまさお）
本館民族社会研究部

藍で黒く染め抜いた胴部の上に、鮮やかな絹の縁飾りが付いている。織り柄から察するに、黒タイの蚊帳だろう。黒タイはベトナムとラオスの国境地域に住む盆地民である。

沢の水は、豊かな米の生産を約束するが、マラリア蚊をも発生させる。蚊帳の使用は予防に有効で、東南アジアでは、伝統的な蚊帳使用地域とマラリア地域はかなり合致しているようである。

日本では涼しげな薄い色の蚊帳が好まれた。中国やベトナムでも白が多い。しかし黒タイのものは総じて黒い。白を喪服の色として忌むのがひとつの理由である。くわえて、間仕切りのない家で、蚊帳の中が唯一のプライベート空間だからだろうか。

蚊帳は、なかで寝る人の行動をも物語る。蚊帳が開かれているのは、すでにふだん通りの活動が始まっているからである。しかし昼寝や着替えの際には、なかに戻ってくる。この開閉運動が、昼と夜を演出し、外からの視線をコントロールしているのである。

蚊帳はめったに取り外されることがない。なかで寝ていた人が死んだことを意味するからである。故人があの世に行っても安眠できるように祈って、墓所に建てる御霊屋に蚊帳を入れることもある。

近年、村では、巧みな意匠のものが減った。身の回りの衣料品を女性たちが手作りするような習慣が廃れてきたからである。かわって、ナイロン製の白い蚊帳が普及しつつある。一方で、北タイ、チェンマイのナイトバザールでは、手の込んだ縁飾りの古布が高額で取引されている。これが市場経済というものだろう。しかし筆者は、その綾錦を夜ごとに天蓋（てんがい）としていた人の魂の平安を、ひそかに念じる。葬礼が終わり、蚊帳が外された寝所の空虚さを思い出すからである。